

北海道開発局旭川建設部への公開質問状

質問 1

名寄市上流の治水基準点である真薫別において、史上最大であった昭和 56 年の洪水は堤防を越えていない。その後、25 年間、開発局による河川改修が進んでいる現在、サンルダムがなくとも、同等の大雨が降ったとき、天塩川は名寄市周辺ではまったく溢れないと推定される。

最近、天塩川河川整備計画 HP で「サンルダムの水位低減効果」という図がアップされた。名寄川のサンル合流点から天塩川合流点に間で最大約 110cm、最小約 40cm の低減効果があると述べているが根拠がまったく示されていない。水位は、当然、河道幅によって異なるので、開発局がいう水位の低減効果とは、それぞれ、どの地点での算定なのかを、河川断面図と Q-H 図を示して明らかにしていただきたい。

また、開発局は、添付資料に示したごとく、サンルダム建設事務所所長名で地元団体に対して、昭和 56 年 8 月の洪水時に名寄市に最も近い治水基準点である真薫別地点でのサンルダムによる水位低減効果は 20cm、天塩川全体の治水基準点であるポンピラ（菅平）での水位低減効果は 10cm であると明言している。この根拠についても、同様の資料をつけたうえで示していただきたい。

質問 2

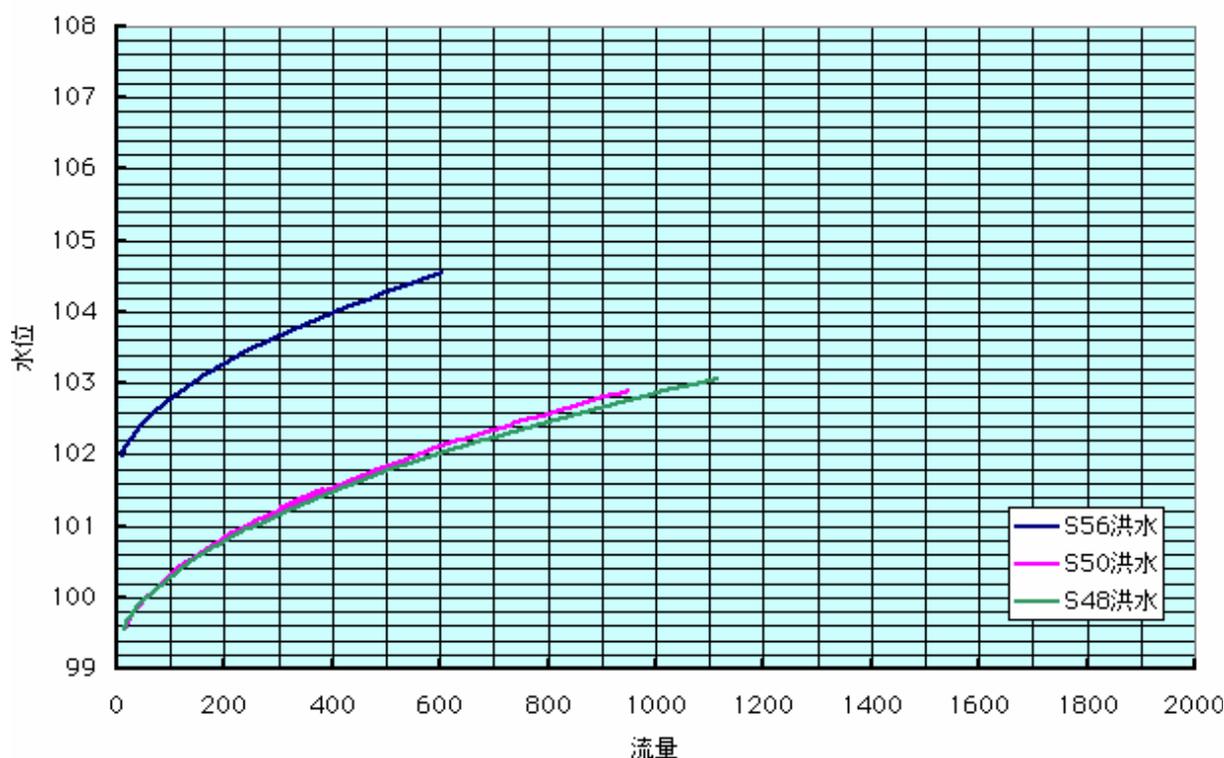
二風谷ダムでは魚道によってサクラマスが遡上して産卵しており、魚道をつけたことで二風谷ダムによるサクラマス資源への影響はない、と開発局は主張しているが、これまでに出されている資料(説明資料 2 参照)では、二風谷ダム完成後、沙流川水系のサムラマス資源は半減している。開発局は、二風谷ダムの魚道によるサクラマス資源の維持効果について、その調査方法、上流でのスモルトの放流量などを含め、ダム建設前と建設後のサクラマス資源量の比較を具体的な数字で示していただきたい。

説明資料 1

下の図は、開発局の資料からつくった真勲別における Q-H 図（水量と水位の関係）である。昭和 56 年 8 月の水位だけ 2.4m 高くなっているのは不自然である。観測点が上流側に移動したのではないかと考えられる。このときの水量は約 600m³/s で水位は約 104.5m、一方堤防の高さは 107 ~ 108m であり、この場合は氾濫しない。整備計画では真勲別の目標流量は 1500m³/s である。昭和 56 年 8 月の Q-H 図で 1500 m³/s の水位を推定するのは難しいので、昭和 48 年と 50 年の図を外挿してみると、このときは水量 0 から 1500 m³/s までの水位差が 3.6m なので、昭和 56 年に当てはめると 105.6m となり、やはり外水氾濫は起きないと推定される。

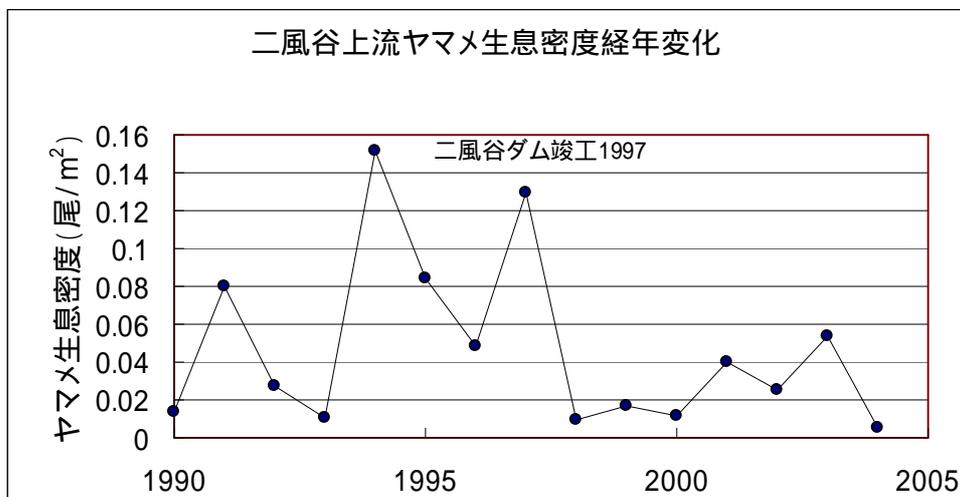
天塩川整備計画では、当面 20 - 30 年間の治水の目標流量を史上最大であった昭和 56 年のピーク流量としている。このときの真勲別の計画高水位は 106.32m である。昭和 56 年のピーク流量を氾濫することなく流せているのであるから、サドルダムがなくても、氾濫は起きないことは明らかである。開発局はサドルダムが名寄市の治水のために必要であることと強調しているが、名寄市にもっとも近い治水基準点である真勲別でみた場合、サドルダムがなくても、目標流量は処理することができるのは明らかであり、サドルダムが必要ないといえる。

真勲別地点・洪水ごと Q-H



説明資料 2

第10回委員会で提出された資料に基づき平均生息密度(尾/m²)の経年変化を図に示した。これを見ると、二風谷ダム竣工の1997年以降生息密度が減少しているのがわかる。二風谷ダム竣工の1997年のデータは、ダム前か後か判断できないので除いて考えると、1990-1996年を平均密度は0.059尾/m²、1998-2004年平均は0.023尾/m²なので、二風谷ダム建設後に密度は半減していることになる。また、上流ではスモルトを大量に放流しているため、その影響を考慮して検討しなければならない。



天塩川流域委員会への皆様へ（意見書）

第10回の流域委員会を傍聴させていただき、議論の流れがわかるように、不十分ではありますが、別紙のような「傍聴記」をつくりましたので事務局を通じて送らせていただきます。本来、このような議事録は、人員と予算をもった事務局がきちんと準備して公開すべきものであり、私たちがボランティアでやるべきことではありません。また議事録が公開されていないことは、委員会の公開性・正当性・透明性を自ら半ば否定することにもなります。委員会の皆様におかれましては、次回からでも、委員会の責任において、きちんとした議事録の作成を検討していただきたいと存じます。

議事録全文公開の必要性 第9回委員会議事要旨の問題点

我々は議事要旨では不十分であり、全文議事録が必要という考えで第9回委員会傍聴記を作成した。第10回委員会で第9回委員会議事要旨が公表されたので、検討した。

議事要旨は40字×43行×7ページであり、傍聴記は45字×47行×26ページであった。傍聴記は議事要旨の約4.5倍の字数であった。このため、議事要旨では、短くなっているため重要なことが削除されている点が見られるので、指摘したい。

(1) 不適切な削除・・・環境影響評価分析と整備計画とどちらを先に論議すべきか検討された後、傍聴記では委員長は「今後も平行して進めていくということで、今日のところは提案通りの進め方をお願いします」となっているが、議事要旨では「当初の通り議事を進めていく」とされていて、「平行して進めていく」という言葉が削除されているのは不適切である。

(2) 開発局の説明が削除されている・・・傍聴記では8ページ下から約1/5から13ページ上から約1/5まで開発局の説明が記載されているが、議事要旨では削除されている。これでは委員会で開発局が何を説明したのか不明であり、その後の議論に役立たない。例えば、二風谷のヤマメ生息数の調査結果から「二風谷ダムによってサクラマスが減少したことはない、という風に考えております。」という重要な発言が記載されていない。重要な問題が削除されているのは議事録の意味がなくなる。開発局の説明も全文掲載すべきである。

(3) 議事要旨が短くなっているため発言が正確に記述されない・・・例えば、議事要旨の 天塩川水系河川整備計画についてのすぐ下に6行の文章があるが、これは岡村委員の発言である。傍聴記では28行となっている。両者を比較すると、傍聴記では岡村委員の意見がいきいきと理解できるが、議事要旨では正確とは言えない。岡村委員の後の出羽委員の発言や、その後の前川委員の発言（議事要旨では13行、傍聴記では46行）、その後の水質などの酒向委員の発言（要旨では9行、傍聴記では63行）などでも同様である。

第10回の委員会での議論を聞き、私どもとしては、以下の3点について、次回の委員会でさらに議論を深めていただきたく、要望するとともに、開発局に対しては、皆様が検討するうえでの基礎なる資料を、別紙のいような公開質問状としてお送りしましたので、次回の委員会までにあわせてごらんいただき、次回委員会で、これらの重要な問題について、さらに検討していただきたいと存じます。

1：開発局は、サンルダムがないと、とくに人口・資産の集中する名寄市での、天塩川の氾濫を防げないと主張していますが・・・

サンルダムによる当面の治水の目標流量は史上最大であった昭和56年の洪水で出た流量と同じです。

ところが、名寄市上流の治水基準点である真薫別において、史上最大であった昭和56年の洪水は堤防を越えていません。その後、25年間、開発局による河川改修が進んでいる現在、サンルダムがなくても、同等の大雨が降ったとき、天塩川は名寄市周辺ではまったく溢れないと推定できます。流域委員会では、この事実を重く見て、私たちが開発局への公開質問状でただしているように、いま、史上最大であり、また、いまの治水計画の目標となっている昭和56年の洪水時と同規模の大雨が降っても、名寄市周辺では天塩川は溢れないではないか、そのときのサンルダムによる水位の低減効果は？といった問題を検討し、サンルダムが名寄市の治水にとってほんとうに必要なものかどうかを、じゅうぶん討議していただきたいと要望します。

2：サンルダムによる天塩川水系のサクラマス資源への影響が問題になっていますが最新の魚道が設置された沙流川、二風谷ダムで、サクラマス資源に悪影響が出ていないからだいじょうぶ、と主張していますが・・・

しかし、公開質問状で示したように、二風谷ダムの影響は、サクラマスに無視できない大きな影響を与えていると私たちは考えています。

サンル川は遡上してきたサクラマスの産卵場所であり、その幼魚であるヤマベの密度は二風谷に比べて極めて高いので、ダムによる影響の深刻さについては徹底的に検討すべきです。

天塩川資料集にサンル川の子マメ生息密度のデータが記載されているので、経年変化を調べてつくったのが図1です。サンル川における子マメの生息密度は平均すると、0.89尾/m²になります。二風谷ダム上流部のダム建設以前の値(0.059尾/m²)と比較するとサンル川の子マメ密度は約15倍にもなり、サンル川の子マメ生息密度が極めて高いことを示しています。サンル川にダムが建設されると、この高密度の子マメの生息密度が大きく減少することが危惧されます。

また、サクラマスは重要な漁業資源です。天塩川も関連する、北海道の日本海側のサクラマス漁獲量を、農水省統計局のつくった水産統計で調べてみました(図2)。残念ながらサクラマス単独の統計はなく、カラフトマスと一緒にになったマス類の合計しかわかりませんし

たが、日本海側ではカラフトマス漁獲量はサクラマスと比較して少ないので、図2に示したマス類の大部分はサクラマスと考えられます。

1960年代後半には10000トン近い漁獲がありました。1970年に入ると急速に減少して、1999年には500トン近くに減少しています。おそらく多くの河川でダム、砂防ダムなどがつくられたため、サクラマスが上流の産卵場所まで遡上できなくなり、サクラマス資源が減少したものと推定されます。

今後、もっともサクラマス資源が豊富な天塩川のサクラマスに大きな打撃を与えるサンルダムが建設されると、日本海のサクラマス全体にも大きな影響が出る可能性が高いと思われます。漁業資源保護の観点からも、サンルダムの問題を十分に検討していただきたいと思えます。

図1

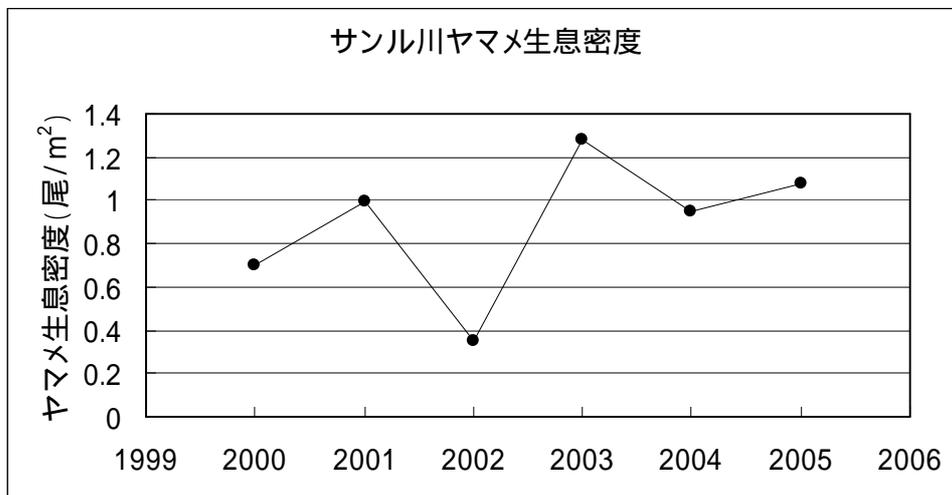
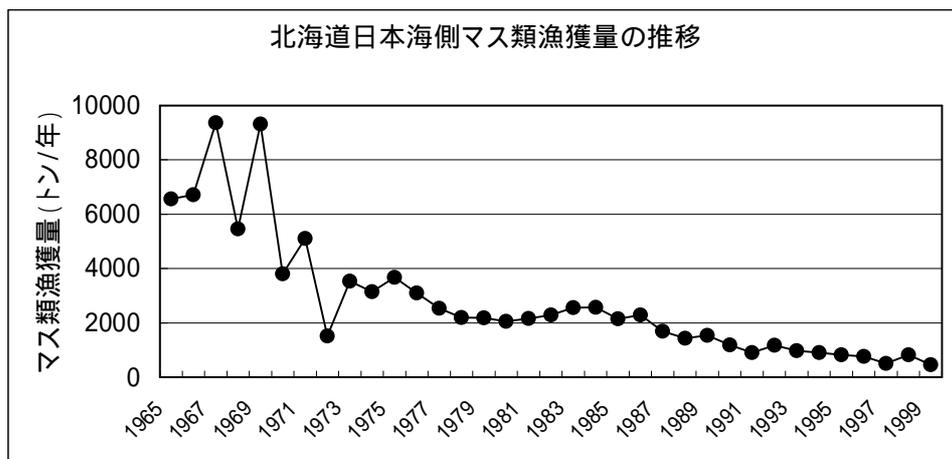


図2



3 : 魚道をつくるからサクラマスはだいじょうぶ、という議論ばかりされますが・・・

生まれてくる赤ちゃん（ヤマベ）は海に下らなければなりません。広大なダム湖ができると、流れのあるところだけで生息できるヤマベは、ダム湖を渡ることができず、海には降りられなくなってしまうのです。アメリカではすでにこの問題が深刻になり、そのためにサンルダムと同じような大きさのダムが撤去され始めています。

サンルダムは二風谷ダムのような、水をためない「流れダム」ではありません。ダムの上流には流れのない、広い湖ができてしまいます。こうなると、サクラマスは海に下れず、ダム湖にとどまってしまう「湖沼型サクラマス」になってしまう危険性があります。

一般にダム湖や天然湖においてスマルト（幼魚）が降下した場合、湖沼型のサクラマスとなる例が知られています。資料 48-11-9 では、開発局は、「二風谷ダムではスマルトの残留魚や湖沼型サクラマスは殆ど確認されず、ダム湖を通じて降下している」と説明しています。しかし、この説明の根拠となったもとの調査報告の考察では、これは、「二風谷ダムが回転率 100 回以上の“流れダム”であるという特性」のおかげであると書かれています。

サンルダムは H7 年の環境影響評価書において、回転率はわずか 3.2 回と記載されています。これは河川工学的には「とまりダム」であり、ダムの上流は湖になってしまうので、二風谷ダムのような「流れダム」効果はまったく期待できないと思われます。

サンルダムによるサクラマスへの影響は、いくら魚道を設置しても解決できないことを、委員会では十分にご議論いただきたいと存じます。

注) 回転率 (回/年) = 年間総流量 (m³/年) / 貯水容量 (m³)

ダムの水が年間何回入れ替わるかという指標

以上